

体育科教育における学力規定について

－内海和雄学力論に着目して－

尾崎 颯音（宮城教育大学）

1. 目的

本研究の目的は、現在学校教育、特に体育科においても学力規定がなされていることをふまえ、体育科学力を限定的に捉えようとした内海和雄の学力論を再考し、体育科で身に付けるべき資質・能力は何か改めて問い直すこと。また、その立場から見える現状の規定の捉え方や、成果・課題を明らかにすることである。

2. 研究方法

文献調査を基本とし、まず戦後教育学の中での学力論を概観し整理する。その後、体育科教育学の中での主要学力論を挙げ、それらと内海の学力論を比較検討することで、成果・課題を明らかにする。

3. 結果と考察

現状の学力規定について、以下三つの課題を挙げることができた。

- (1) 教科独自の学力規定
- (2) 主体的に学習に取り組む態度
- (3) 学力要素の多面性

これらの課題を考慮しながら、体育科教育においては現状どのような学力規定、またその他諸能力を整理すればよいか、筆者の考えを以下に示す。

大枠に「体育科で身につく力」を設定し、それを「内容的側面」「過程的側面」の二側面から捉える。そのうち、「内容的側面」にあたる部分が体育科において学力規定すべき部分であると考え。現状の規定のように3つの要素に分けるのであれば、①技能②知識③分ち伝える力であるとした。この3要素は、それぞれの右側に示した内容を習得すると具体的に表れてくるものである。

「過程的側面」については、「内容的側面」である学力を身に付けようとするれば、その過程で身につけていくとした。また、それらは到達度評価をすることは難しいが、現状も行われている個人内評価を利用し、発達の様子を見とることは可能である。評定のように評価を数値化することはできないが、観察した様子から、学力の内容や、教師の指導方法を見直すことに生かすことができる。

4. 結論

本研究では、体育科で身につく力を二側面から把握し、そのうちの「学力」が背負うべき範囲を明確に示した。今後は、この二側面がどのように結びついていくかの具体的なすじ道を把握していきたい。

5. 主要参考文献

- 1)内海和雄(1984)『体育科の学力と目標』青木書店.
- 2)内海和雄(1995)『体育科の新学力観と評価』大修館書店.
- 3)海野勇三(1985)「体育科教育における学力論研究序説(1)」鹿児島大学教育学部研究紀要,人文・社会科学編,第37巻.

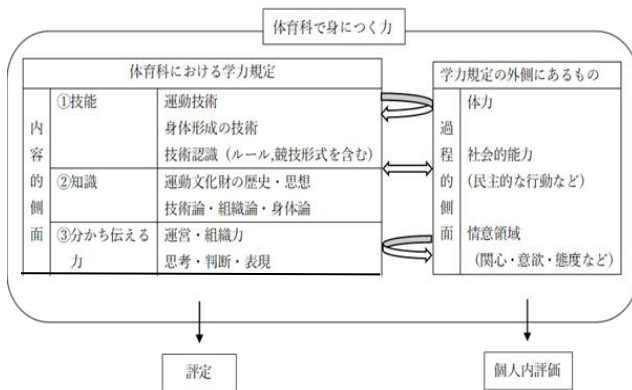


図1 体育科学力と構造